

「再び、水入りについて」

今大会は、八試合場に分かれて熱戦が繰り広げられた。最も出場者が多かった男子 73 kg級では、力を出し切った GS（ゴールデンスコア方式）が多く見られた。決勝戦は小田桐美生(国士館大学)と竹市裕亮(国士館大学)の同門対決、お互いに積極的に技を出すものの 4 分が過ぎ、GS に入り小田桐美生が内股で一本勝ちとなった。女子 52 kg級の決勝戦も落合倅(東京学芸大学)と川原輝子(東京学芸大学)の同門対決であった。落合倅が熱戦を制して優勝した。本大会の最終試合は、女子 57 kg級の決勝戦。濱田美音(日本大学)が莊司理彩(東海大学)を抑え込みで一本勝ち。大会を見事に締めくくった。

ところで、今年は、昨年の大会と 2 つの異なる点があった。

1 つ目は、マスクを外しての大歓声が試合会場に響いていたことである。第 9 波の拡大が懸念されるなかではあるが、コロナ前の会場の熱気が戻ってきた。

2 つ目は、数台の扇風機が試合会場に設置され、折にふれ、熱中症予防のアナウンスが流されていたことである。熱中症対策を実施した東京都柔道連盟には感謝を申し上げたい。

この点については、昨年のこの大会で掲載したコメントがきっかけになっている。その一部をもう一度以下に示しておく。

「相撲には「水入り」がある。何分間かの膠着状態が続いた場合に、行司が一時的に取り組みを中断し、休憩時間を挟む。柔道もこの考え方を取り入れてはどうだろうか。GS になった場合、汗を拭いて水分補給をしてもよいというような「水入り」のルールを設けるのだ。

柔道流「水入り」により、一息入れての新たな熱戦も期待される。ジュニアの出場資格は 15 歳～20 歳で、まだ成長段階にある選手が多い。柔道における根性論や、試合の流れがあることも承知のうえで、あえて試合中の水分補給を提案したい。大切なのは、選手の健やかな成長である。」

高校野球ではすでに熱中症対策が進んでいる。タイブレーク制を導入して試合の決着を早めようとしている。投球数制限は 1 週間で 500 球以内とした。熱がこもるのを防ぐために、白色のスパイクを履けるようにした。雨で試合が中断した場合は、翌日以降にその続きから再開するようにした。連戦を避けるため、大会期間中は 3 日間の休養日を設けた。今年の夏からは新たに、5 回終了時に 10 分間の「クーリングタイム」を設けた。高校野球ではこれだけの努力をしている。柔道界もこのような試みを見習うべきだろう。

聞くところによると、沖縄県では、高校生の柔道大会において、既に GS 前に「水入り」タイムを導入しているともいう。

そこで、今回出場の選手たちに GS での柔道流「水入り」に対する意見を聞いてみた。

結果は以下の通りである。

男子：賛成 24 名、反対 6 名（賛成は 80%）

女子：賛成 27 名、反対 3 名（賛成は 90%）

賛成の主な理由：リセットできるのでパフォーマンスを上げることができる。

反対の主な理由：試合の流れが変わるのが不安である。

選手たちの声に耳を傾け、柔道界の新たな取り組みに期待するとともに、我慢が美学であるという前時代的な精神論を改め、選手のパフォーマンスを上げるための科学的なアプローチを模索すべきと考える。

（広報副委員長 大坪宏至）